

John 11:16-57

(ヨハネ11:16)「そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に言った。『私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。』」

トマスは人を憂うつにする奴だと思いませんか？彼はイエスさまといっしょに死ぬのだと考えていました。でも、神さまに感謝すべきことには、彼はイエスさまといっしょになら進んで死ぬつもりだったのです。私は、シモン・ペテロがそうだったように、トマスも本気だったと思います。

(ヨハネ11:17-19)「それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れられて四日もたっていた。ベタニヤはエルサレムに近く、三キロメートルほど離れた所にあった。大ぜいのユダヤ人がマルタとマリヤのところに来ていた。その兄弟のことについて慰めるためであった。」

ベタニヤはエルサレムの黄金の門から3キロちょっとのところがありました。多くのユダヤ人がマルタとマリヤといっしょにいるためにエルサレムからベタニヤに歩いて来ました。見たところ、彼らはベタニヤで著名な家族で、エルサレムでもよく知られていたようです。

(ヨハネ11:20-22)「マルタは、イエスが来られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家ですわっていた。マルタはイエスに向かって言った。『主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。』」マルタはいつでも前が出るタイプだったようです。彼女は行動の人でした。彼女はすばらしい信仰を示しましたが、同時に気が短く、神さまのみこころに譲歩することに欠けていました。対照的に、マリヤは進んで家にじっとしています。マリヤはイエスさまの足元に座っていることを学んだのです。

マルタはもう少しイエスさまの足元に座っているべきだったことがここで分かります。彼女は言います。「あなたが神にお求めになることは何でも」。マルタよ。あなたは“主が”神さまであることが分かっていないのですか？主は、人となられた神さまです。主が家に来られて、自分の食卓に座られ、自分の焼いたビスケットを食べられたのに、主が神さまであることに気づかなかつたのですね？いやはや、私たちはどれほど主の足元で時間を過ごさなければならぬことでしょう。どれほど耳を傾ける必要があることでしょう。

(ヨハネ11:23-26)「イエスは彼女に言われた。『あなたの兄弟はよみがえります。』マルタはイエスに言った。『私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。』イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。』」

マルタはよみがえりを信じていました。でも、聞いてください。将来のある日に私たちが栄化されたからだを受けるのだということを知るほうが、今、主を待ち望む者が新しく力を受けるという確信を持つよりも信仰の要求は少なく済むのです。主がいつか来られて死人をよみがえらされることを信じるほうが、明日私が神さまのために生きることができると信じるよりも簡単です。悲しんでいる人を慰めて、

「まあ、いつか愛する家族には会えますよ」と言うのはあまりにも簡単です。そこにはたいした信仰もありません。

「私は家族を亡くしたばかりだけれど、神さまが私とともにおられて、すべてのことを最善にしてくださいという確信で慰められています」と言うのには、大きな信仰が必要です。お分かりのとおりマルタは、死人のよみがえりがあることを旧約聖書から知っていましたが、イエスさまが今、自分を助けてくださることができるとは信じていなかったのです。

イエスさまは彼女に言われます。

「マルタ。“私が”よみがえりであり、いのちであることをあなたは知らないのですか？」もしイエスさまを持っているなら、私たちはいのちを持っています。

「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」ここで言われている死とは、霊的な死のことです。その人が霊的に死んでいても、主を信じることによって彼は「生きるのです。」そして主は将来を臨み見られ、主を信じる者は決して死ぬことがないと言われます。永遠のいのちは、その人が救い主を受け入れた瞬間から始まります。生きていてイエスさまを信じる者はだれでも、決して死ぬことはありません。なぜなら、イエスさまが

すでにその人のために死なれたからです。それはつまり、その人が罪の代価としての死を死ぬことがない、ということです。その人は決して神さまから引き離されることはありません。そしてイエスさまは質問されます。「このことを信じますか？」

(ヨハネ11:27)「彼女はイエスに言った。『はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。』」

マルタは、ペテロがしたのと同じ告白をしています。彼女は主がメシヤであることを理解しました。

(ヨハネ11:28-31)「こう言ってから、帰って行って、姉妹マリヤを呼び、『先生が見えています。あなたを呼んでおられます』とそっと言った。マリヤはそれを聞くと、すぐ立ち上がって、イエスのところに行った。さてイエスは、まだ村に入らないで、マルタが出迎えた場所におられた。マリヤとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、マリヤが墓に泣きに行くのだろうと思いい、彼女について行った。」

マルタは内緒でマリヤに話したのですが、神さまがこのできごとを支配しておられます。群衆全員が墓地に行くこととなります。彼らはマリヤがイエスさまにお会いしに行くのだということを知りません。

(ヨハネ11:32)「マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかると、その足もとにひれ伏して言った。『主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。』」

彼女もマルタと同じように、もしイエスさまがここにいてくださったら自分の兄弟は死ななかつたでしょうに、と語っています。これだからこそ、イエスさまはあとになって、ご自分がいなくなるのが得策だ、もっと良いことだと言われるのです。このできごとが、なぜそのほうが得策かを明らかにします。主が肉体を持っておられる限り、主は地理的に限界があります。もし主があなたの街におられるなら、私の町におられることはできませんでした。もしイエスさまが去って行かれなかつたら、主は慰め主である聖霊さまを送ることはおできにならなかつたのです。でも今、聖霊さまが来られたので、聖霊さまはどこにでもいることがおできになるのです。聖霊さまは今日、ひとりひとりの信者のうちに住んでおられます。ですから、聖霊さまは私のいるところに、あなたのいるところに、そして世界の反対側に、同時にいることがおできになるのです。

(ヨハネ16:7)「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところへ遣わします。」

(ヨハネ11:33-35)「そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、言われた。『彼をどこに置きましたか。』彼らはイエスに言った。『主よ。来てご覧ください。』イエスは涙を流された。」

もしもあなたのご家族の死について、神さまがどのように感じておられるか知りたいなら、ここを見てください。主は霊の憤りを覚え、心の動揺を感じられたのです。死は恐ろしいものです。そして主はあなたに同情されることを確信することができます。

主の同情は、生きている者に対するものです。主は死んだ人のためにはご自分が何をなさるかご存知でした。

「イエスは涙を流された。」ヨハネの福音書は私たちにキリストの神性を示すために書かれているのですが、ここでは、イエスさまはご自分の人間性を示されています。主はあまりにも人間だったので、ラザロがどこに置かれてあるかを質問さえされました。そしてここに神さまが今日葬式でどのように感じられるかを理解することができます。主は私たちとともに泣かれるのです。主はご自身のうちで憤られます。私は葬式で泣いてはいけない、勇敢なクリスチャンでいなければならない、などと言うクリスチャンには我慢がなりません。死は素敵なものではありません。ひどいものです。イエスさまは“涙を流された”のです！

(ヨハネ11:36-37)「そこで、ユダヤ人たちは言った。『ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。』しかし、『盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかつたのか』と言う者もいた。」

ユダヤ人たちはここで見当違いをしています。主が涙を流されたのは、主がラザロを愛しておられたからではありません。主は死んだ者のために涙しておられるではありませんでした。主は生きている者たちのために涙を流されたのです。

ユダヤ人たちは主が盲目の人をいやされたできごとにさかのぼっています。そのできごとが彼らに大きな印象を与えたことは明らかです。

(ヨハネ11:38-40)「そこでイエスは、またも心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。イエスは言われた。『その石を取りのけなさい。』死んだ人の姉妹マルタは言った。『主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。』イエスは彼女に言われた。『もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。』」

今日、人々は死という話題を避けて通ります。葬儀屋さんには、死が感じの良いできごとであるように思えるように、すべての努力をします。でも、とても正直に直面しようではありませんか。遺体に香料を詰めたり、顔を塗ったり、良質のスーツを着せたり、そしてその遺体を花に囲まれたきれいな棺おけに入れても、私たちは死を覆い隠すことはできません。ショックを和らげるのを助けるためにこのようにしますが、死はひどいものなのです。

マルタは、彼は埋葬されて4日もたっており、臭くなっているでしょうと言いました。遺体は腐り始めていたでしょう。これは露骨に聞こえると思う人もいるでしょう。死は露骨なものです。ひどいものです。このケースは、確かに奇蹟を必要としています。

(ヨハネ11:41-42)「そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて、言われた。『父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです。』」

思い出してください。このできごと全体が神さまのご栄光のためなのです。人々にご自分がこれからしようとされていることが父なる神さまのみこころであり、だからこそ父がご栄光を受けられることを知らせるために、イエスさまは声を出して祈られます。主はまわりにいる人々が益を受けるために、ご自分の祈りを声に出されます。

(ヨハネ11:43-44)「そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。『ラザロよ。出て来なさい。』すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。『ほどいてやって、帰らせなさい。』」

ここで申し上げておきたいのですが、私は、イエス・キリストに生き返らせていただいた人たちが大勢いたと思うのです。大勢のいやされた人々、視力をいただいた何百という人々がいたと私は思います。福音書は、その中のほんの少しだけを私たちのために記録しています。

ラザロのために、いのちが古いからだに回復されました。彼は長い布で巻かれたまま出て来ました。主が死からよみがえられたとき、主は頭に巻かれた布切れを含めて、すべての長い布を主の体に巻かれたままの状態に墓の中に残されました。主は布からそのまま出てこられました。なぜでしょう？なぜなら、主は栄化されたからだが出て来られたからです。イエスさまが出て来られるために、彼らは石を取りのける必要はありませんでした。外側の人たちが中を見て、墓が空っぽであることが分かるように石がころがされていたのです。主の栄化されたからだは、封印された墓から去ることもできたし、ドアに鍵のかかった部屋にはいることもできたのです。

この中に、美しい救いの絵があります。私たちは咎と罪の中に死んでいて、神さまに対して死んだ者でしたが、今キリスト・イエスのうちにあって、神さまに対して生きたものとされました。でも、私たちひとりひとは、この長い布によって、押さえつけられています。パウロは言いました。

(ローマ7:15、24)「・・・私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。・・・私は、ほんとうにみじめな人間です。・・・」

救われていない人がこう言っているのではありません。これは信者です。イエスさまは、私たちがこの長い布から自由になって欲しいと願っておられます。主は言われます。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

(ヨハネ11:45-46)「そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなされたことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。しかし、そのうちの幾人かは、パリサイ人たちのところへ行って、イエスのなされたことを告げた。」

この人たちはこの奇蹟を無視することはできませんでした。

ここまでで、ヨハネの福音書は半分ほどにただけなのに、これでイエスさまの公的なミニストリーが終わると知ったら、あなたは驚かれるかも知れません。主の公的なミニストリーは、バプテスマのヨハネが主を神さまの小羊とはっきり示したときに始まりました。そしてラザロを死から生き返らされたときに終了しました。ご覧のとおり、ヨハネは、主が死なれる前の48時間に、最初の32年11ヶ月3週間と5日の主の人生とほとんど同じだけの時間をかけています。実際のところ、すべての福音書記者たちが同じパターンを使っています。彼らは最後の8日間に強調点を置いています。

4つの福音書全体には89章あります。そのうちの4章がイエスさまのご生涯の最初の30年を、そして85章は、主のご生涯の最後の3年間を網羅しています。この85章のうち、27章は主のご生涯の最後の8日間を扱っています。ですから、福音書の記録の約3分の1は、最後の数日間を扱い、強調点はイエス・キリストの死とよみがえりに置かれています。

もし、イエス・キリストの死とよみがえりが顕著でないならば、それは福音の間違った記述です。事実、それが福音を構成しているのです。(Iコリント15:1-4参照)

(Iコリント15:1-4)「兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことはしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。私があなたがたに最もたいせつなことから伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、」

福音書記者たちは、のちになってパウロがしたことと同じことをしました。彼は言います。

(Iコリント2:2)「なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。」

この最後を飾る奇蹟によって、懐疑主義者たちがイエスさまに立ち返ったと思われることでしょうか、そうではありませんでした。覚えておられるでしょう。主は前にこのように言われました。

(ルカ16:31)「・・・『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」

だからこそ、神さまは天を裂いて目を見張るような誇示のうちに降りて来られることはされないのです。だからこそ、神さまは今日歩き回って奇蹟を実演することはされないのです。教会が地上を去って、大艱難の時代の間と、千年王国にかけて、偉大な奇蹟の期間がありますが、それすらも人々を納得させはしません。今日、暴徒や大多数の人々が主に背を向けていますが、私たちは静かなやりかたで主を信じるようにと求められています。人々は、群衆がイエスさまを追い求めることがないと不平を言います。群衆は一度もイエスさまを追い求めたことなどないのです！主は死なれ、葬られ、死からよみがえられました。それが福音です。

私たちに奇蹟は必要ではありません。問題は証拠がないことではありません。問題は、人の不信仰なのです。

(ヨハネ11:47)「そこで、祭司長とパリサイ人たちは議会を召集して言った。『われわれは何をしているのか。あの人が多くの上りしを行っているというのに。』」

お分かりの通り、この憎しみの追跡者たちの問題は証拠がないことではなかったのです。主の敵たちは言いました。

「あの人が多くの上りしを行っているというのに。」彼らは主の奇蹟を否定することはできませんでした。

これは悪魔的なグループでした。このとき、祭司長たちはおもに「リベラル」なサドカイ人で、彼らは奇蹟も超自然も受け入れませんでした。その中にはよみがえりも含まれていました。パリサイ人は宗教的な保守派で、当時の政治的な国粋主義者でした。このふたつの集まりは、すべてのことについて全く相手に反対していました。それでもここで彼らは、イエス・キリストに対する憎しみと、主を殺すという決意によってひとつになっています。これは最初の世界教会統一運動と言えるかも知れません。もしイエス・キリストを片付けてしまえるなら、人々は主に対する敵意によって、反対の見解を持っている人々にも協力するのです。これが今の流行です。大多数が神さまのみことばに示されているキリストを片付けてしまおうと企てています。イエス・キリストをそのままに受け入れるのは、少数派です。

(ヨハネ11:48)「『もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうになると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。』」

彼らは、大勢がイエス・キリストに立ち返って革命を起こすのではないかと恐れしました。そうなれば、ローマが彼らに飛び掛る機会を与える、というわけです。彼らは恐れ基準で動いていました。今日多くの人たちをイエスさまから遠ざけている動機は、恐れです。私たちの教会の中でさえも、クリスチャンたちは聖書の真理のために、そして聖書を神さまのみことばとして教える人たちのために、自分の2本の足でしっかりと立つ不屈の精神に欠けています。

(ヨハネ11:49-52)「しかし、彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。『あなたがたは全然何もわかっていない。ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。』」ところで、このことは彼が自分から言ったのではなくて、その年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。」

彼らは、国民全体がローマの手によって死ぬよりも、イエスさまが死ぬべきだと合理化し、そう言い始めました。彼らはイエスさまを殺すことには成功しましたが、それにもかかわらず、テスが紀元70年に破壊したときに国民は滅びてしまったというのは、興味深いことです。

ここに不思議なことが書かれています。カヤパがその年の大祭司であったため、カヤパが正確な予告をしたのです！カヤパは陰謀をめぐらす政治家で、あとになって私たちは、意地悪な悪漢であり王座の背後の権力であったカヤパのしゅうと、アンナスにも会うことになります。このカヤパに預言の賜物があったことだまされてはなりません。旧約聖書のバラムのように、この悪漢は本物の預言を口に出すことができたのです。

(ヨハネ11:53)「そこで彼らは、その日から、イエスを殺すための計画を立てた。そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをしないで、そこから荒野に近い地方に去り、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。」

これは終わりの始まりです。彼らは表立ってイエスさまを殺そうとし、表立って敵意を示しています。エフライムの町がどこにあるのかは、正確には分かりません。おそらくいなかのほうにあったのではないかと思います。

(ヨハネ11:55-57)「さて、ユダヤ人の過越の祭りが間近であった。多くの人々が、身を清めるために、過越の祭りの前にいなかからエルサレムに上って来た。彼らはイエスを捜し、宮の中に立って、互いに言った。『あなたがたはどう思いますか。あの方は祭りに来られることはないでしょうか。』さて、祭司長、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は届け出なければならないという命令を出していた。」

群衆は過越の前に身を清めるためにエルサレムに来ています。彼らがこの終わりのない儀式を執り行い、お互いの肩をすり寄せ合うとき、そこには意見の違いがあり、イエスさまに関する話がされました。彼らは、今年イエスさまは祭りに来られるだろうかを知りたがっていました。彼らは、サンヘドリンが本当に主を追い求めていることを知っていました。ご覧のとおり、もし彼らがモーセを信じないのなら、彼らはだれかが死からよみがえっても信じはしないのです。

この時点で、ヨハネの福音書は区切りに達しました。ここからは、主イエス・キリストの地上でのご生涯の最後の週に近づいて来ています。